

## 要約

創造的な成果、誠実さ、価値観に影響を及ぼす可能性のある外的影響は数多く、動的であり、相互に関連している。そしてそのどれもが、アーティストとしての私自身の仕事の価値や、私自身の実践にどれだけ自律的に取り組み、関与しているかを問うよう促している。このような環境を切り抜け、創造的表現に対する制限を緩和するために、アーティストはこれらの境界を生み出すシステムに挑戦する方法を見つけなければならない。そのためには、個々に定義された価値観、継続的な疑問、自分自身の信念や思い込みへの挑戦、そして意図性を土台とした本質的なアプローチが必要だと私は考えている。

価値観は、個人やコミュニティが自分たちを取り巻く世界をどのように認識し、どのように相互作用するかを形成する。したがって、クリエイターが自分の作品をどのように評価するか、与えられた価値体系が与える影響は、文脈の中で考慮されなければならない。現代において一般的な「価値」の定義は、経済的価値という観点から解釈する傾向を反映している。しかし、ものの本質を評価する際に、価値と金銭的価値をどのように切り離せばよいのだろうか。

初期の人類が粘土とどのように関わっていたかを探ることで、価値という概念を前近代的な視点から考察することができる。粘土は、当初は顔料として、後に最古の陶磁器を作るための媒体として使われるようになったが、このことは、粘土という素材が本来持つ性質や文化的意義と深く結びついた前近代的な価値体系を明らかにしている。

竪穴式焼成は一般的に、窯が発明される以前の最も初期の陶磁器焼成技法として認められている。私が野焼きを探求し始めたのは、粘土を扱う中で、すでに結果よりもプロセスに重点を置くようになっていた時期であり、間違いなく、野焼きはその重点をさらに深めた。材料を集め、野焼き場を準備し、火の世話をする工程は儀式的であり、それは、最初の粘土による成形の工程そのものと同じくらい魅力的で、私を取り巻く自然環境と、私たちの行動がそれに与える影響について、より深い理解を育んでくれる。やがて私は、自分ひとりでこのプロセスに携わっているのではなく、自然環境との共同作業なのだ理解するようになった。そして、その共同作業による予測不可能な、しばしば不完全な結果を受け入れられるようになったことで、失敗や成功に対する考えを完全に変えることができた。野焼き焼成方法は最終的に、陶芸の実践の目的をより批判的に問い直すきっかけとなった。

自分の作品の意義に疑問を抱いた私の最初の反応は、制作から身を引くことだった。私は陶芸以外の表現形態を受け入れた。世の中に大量のものを増やすことなく探求できるものを。しかし、それでもなお、身の回りに蓄積されたモノの価値に疑問を抱くことを止めることはできなかった。作るときに想定した以上の意味を与える方法を見つけたかったのだ。これがきっかけで、私の陶芸作品を多用したソロパフォーマンス

ンス「自己紹介」が実現した。その後、私は「Flow」と題したグループ・パフォーマンスを共同制作し、参加した。これは、陶芸のパフォーマティブな側面を表現するものであり、私の陶芸作品と実践が意味を持ち得る、思いがけない多くの方法を明らかにするものだった。

創作者が自分の作品をどのように評価するかに影響を与える外在的な要因を調べることは、私自身の創作活動の幅を広げ、素材やプロセスに基づく陶という技芸のニュアンスをより深く探求することにつながった。研究が進むにつれ、私は粘土を単なる素材としてではなく、独自の物語と本質的な価値を持つ、生態系の重要な生きた一部として受け入れるようになった。陶芸のプロセスそのものが、環境への配慮であると同時に、資本主義的規範に対する抵抗の一形態となりうることを認識するようになった。そして、アーティストとして、私の仕事は単に物を作るだけでなく、私がどのように存在し、世界と関わるかということだということに気づいた。

私が前進するにつれ、私の実践における次のステップは、本研究を形成してきた疑問やテーマに対するより深い理解によって導かれることになるだろう。本質的に決定された価値観の体系に焦点を当てることで、私が陶芸に取り組む方法と理由を再構築し、資本主義的な期待を覆し、より広範な倫理的枠組みに沿った作品を制作することを目指している。これらの価値観を適用しながら、私の実践は進化し続けるだろう。このようにして修了作品を完成させ発表する際には、新たな洞察を加えて研究を更新し、私の実践がダイナミックであり続け、内外の影響に対応できるようにするつもりである。このプロセスを通して、私はクリエイターがいかにして自分の仕事の価値を取り戻し、それを損なおうとする圧力に抵抗できるかについて、より広範な応答に貢献したいと考えている。